

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第5号

平成27年2月10日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

関城書を貫く北畠親房の熱烈な心情

横井金男著「北畠親房文書輯考」より

行き詰る戦局の中で武家政治を否定

1月の例会で取り上げた北畠親房。

北畠親房が楠正行の生きざまに与えた影響の大きさについては、彼が記した「神皇正統記」や結城親朝にあてた70通もの書簡から、公家優越・武家蔑視の思想や家門観を繙き、第4号で取り上げた。

私は北畠親房が残したとされる関城書を何としても見たいと、同書が掲載されている、横井金男著「北畠親房文書輯考」（昭和17年7月・大日本百科全書刊行会発行）を取り寄せた。

横井金男は、同書の冒頭に関城書全文を載せ、その解説を寄せている。ここに、その骨子を紹介する。

関城書本文は、残念ながら掲載できないが、約2400文字からなっていて、興国3年（1342）ごろ、関城にあった北畠親房が、高師冬の攻撃に対する援軍を求めて、東国の豪族結城親朝に送ったとされる書状の内の一通である。横井金男は、関城書の偽書説にも触れているが、江戸時代、白河の民間から発見された後、「續本朝通鑑」「大日本史」等に収められた経緯に触れ、「一步譲ってその真偽相半ばするとしても、その歴史的価値は十分認められなければならない」と結論付ける。

関城書の書き出し、「去年六月、凶徒師冬等襲来之後、・・・」の冒頭文は、興国2年（1341）6月ごろの戦況より始まる。

そして、「移當城以来、分城彌縮、士卒已減、艱難之甚、不_レ言而可_レ知」と続くが、当時の行き詰った戦局を察するに難くない。しかし、結城親朝よりの援軍は一兵もなかった。

次に、「當時近境之中、御方城郭・・・」と記しているのは、この急迫る常陸官軍の最後の六城の様子を伝え、外には高師冬の攻撃、内には味方の諸城の苦戦を報じて、結城親朝の援軍がぜひともに必要なことを力説する。

「関城者、宗祐一身、日夜馳走、至今可_レ謂_レ堅確

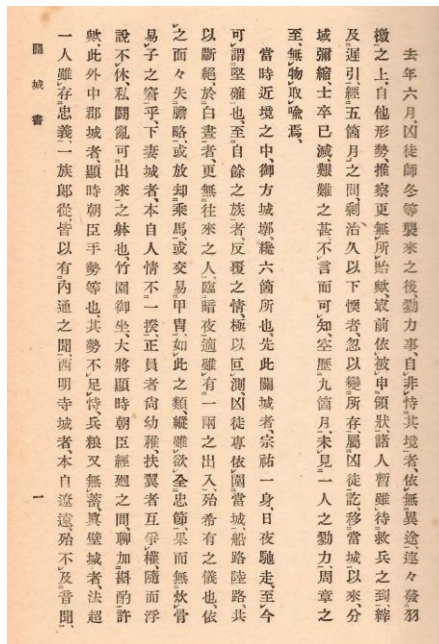
也」と続くが、親房の扱れる関城にあつては、城主宗祐は一心に忠義の節を守つて堅実というべきであるが、他の族に至つては反覆の様子もなしとしない、と伝えている。

親房は、関城書の第二節で、大義を説き、忠孝を語り、人の子の道を論しながら、結城親朝への援兵を命じ、その説破に努めている。

第二節は、「抑勅力間事、其境計略之分、大概推察之後者、不_レ及_レ盡_レ詞、依_レ無勢_レ甚酌之條、誠又非_レ無_レ其謂_レ、」の書き出しで始まるが、この中で、親房は我が子顕家の心情を例証として、表面ずら結城親朝の利己的な理由を論破し、内面の烈々たる義心に訴えている。

そして、この節の最後で、親房自身の悲壮な決意を語り、わが言を信ぜよ、そして常陸への援軍をただちに決行せよ、と声なき命令を大呼する。

即ち、「運命云極者、失_レ一命_レ之外無_レ他事_レ」とまで言う決意を語り、「人之將_レ死、其言善云々、」と記して、わが言をよく聞け、そして願わくば信ぜよと大聲して、大義を説き、忠孝を語り、人の子の道を教え諭すのであ



る。

第三節は、大義論に入り、その立論の基礎として、前段で我が国体の優秀なるを説き、後段で武家政治の我が国体に反する所以を説くのである。

即ち、「我國者、天祖經始之地、日神統領之州也、・・・」と、我が国は神国であり、国を傾けんとする者は、久しからずして自らを滅亡せしめ、逆節を図らんと欲する者は、その一族すべて断絶するのときは周知の事実である、と。

更に続けて、「情見_一和漢之風_一、成_一大奸_一者、雖_一終取_一敗、已有_一過_一人之智力_一、暫保_一首領_一也、今尊氏等・・・」と、和漢の風を思い見るに、凡そ大奸をなすほどの者は、むろん最後は己を全うすることはできないが、一応、普通の凡人に過ぎたる智力はある故、暫くの間、首領を保つものである、と足利尊氏は政道を知るべき器にはないと、結果として武家政治を否定するのである。

この節の最後は、「承久以来剩拘_一義時・泰時等指麾_一、・・・有_一心之輩、見_一先祖之譜系_一者、可_一不_一心恥_一哉」とあり、武家政治の否定であり、反国体的な幕府に従属することの不可なることを説明したものである。

天下広しといえども汝一人の態度にある！

親房は、このように切々と訴え、いよいよ関城書の最後で、結城親朝への教訓を記す。

親房は、結城親朝を教訓するにあたって、ただちにそのことを直言するのではなく、あくまでも慎重に、細心の注意を払って、結城親朝の怒りを買うことを避け、先ず、当代一般人心が誤っている傾向について筆を進める。

「幸遇_一一統之聖運_一、匪_一啻不_一失_一本所帶_一、直承_一・・・」と、先帝後醍醐帝の英志によって、天下一統の時運に遭い、万民等しく我が国体の真の姿に巡り合い、その上、直接的には、帝に伝来の所領を失わざるのみならず、綸旨を賜って、初めて官禄を得ることができるのであるが、このことを真に理解できない輩＝当代武士が多い、と誤れる傾向を説くのである。

そして、関城書は、結城親朝の胸を直接に打ちたたいて、義に生きよ、節に死せよ、それこそ家門の榮譽であり、先祖結城秀郷に対する道であり、父、結城宗広の遺志と弟、結城親光の義烈に答える、ただ一つの道であると激語する。

横井金男は、北畠親房の関城書は、なんという大文章であろうと、以下の通り、締めくくっている。

『大義忠孝を説き、戦局を語り、しかも情において忍

びざる熱烈たる心情さえ吐露して、天下広しと雖も結城親朝汝一人の態度にあるのだということを、厭くこともなく述べ来た。

「貪_一餘命_一望_一勳力_一者、上天罰_一之」と云い、「唯為_一天下_一發_一此狂言_一」と云う。そして最後に「雖_一存_一雖_一亡_一可_一無_一心底之鬱_一而已」と云って筆を擱けるときの感懐は如何であったろう。』

しかし、この頃すでに結城親朝は高師冬に通じていたから、親房に伝えなかったのは勿論であった。

そして、興国4年(1343)の11月11日、城は落ちた。関城も、大宝城も、そして伊佐城も！官軍は、四散した。

親房はその折いかなる方法によったものか、関城を脱出して、辛うじて吉野に辿りついたのである。

北畠親房は、結城親朝に対しては、大義を説き、忠孝を語り、人の子の道を論じ、南朝帰順を説いたにもかかわらず、楠正行に対してはどうかであったか。

楠正行に対して、「お前は何をぐずぐずしているのか。父、正成は湊川において身命を惜しまず忠節のかぎりを尽くしたのではないか。父の死を無駄にするのか。」と、死地に追いやったであろうことを考えると、楠正行が不憫に思えてならない。

同書によると、北畠親房は、正平3年(1348)1月5日、四條畷の合戦で楠正行が敗れるや否や、翌6日に、後事を議せんと和田一族を召し集めようとする書状を発しているにつけ、その思いが一層増すのである。

(表面写真は「北畠親房文書輯考」巻頭に掲載されている関城書5頁の内の1頁)

結城親朝

宗広の嫡男。父とともに鎌倉幕府の討幕運動で功を挙げ、建武新政時、陸奥將軍府の役人に任じられる。後醍醐帝と尊氏の間で争いが生じると、当初は南朝方に組み、親房からたびたび救援の書状を受けるも動かず、最後は北朝に内応する。

結城宗広

元弘3年(1333)、鎌倉に攻め入り、幕府を倒した功により、後醍醐帝の厚い信任を受ける。最後まで、南朝に忠実な武将であった。

結城親光

宗広の二男。親朝の弟。建武の新政では後醍醐帝に登用され、楠木正成、千種忠顕、名和長年と合わせて「三木一草」と称された。4人の中では最も早く果てた。

(文責：「四條畷楠正行の会」代表 扇谷 昭)